

「コミュニケーション・キャリアデザイン・こころの支援からなる上田モデルの構築」に向けて



石塚昌保

東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターフェロー
四谷ゆいクリニック臨床心理士



阿部 裕

東京外国語大学特任研究員
明治学院大学心理学部教授

1. はじめに

今日、在住外国人は222万人を超えている。来日した外国人は、言語、文化、生活、習慣、コミュニケーションの取り方の違いなどから、常に異文化ストレスにさらされている。こうした異文化ストレスを自分の中でうまく取り込み、そのストレスを抱えながら生活することができれば問題はないのかもしれない。しかし、異文化ストレスを処理しきれなければ、その人らしく生活することの障壁になる場合さえある。こうした異文化ストレスを処理し、それを乗り越え、日本の中でその人らしく生活していくためには、当然、在日外国人側だけの努力だけではなく、受け入れ国における日本人側との協働作業が必要である。

在日外国人は日本において、仕事という接点を持って生活している人が多い。

一口に仕事といっても様々なスタイルが考えられるが、異文化ストレスに対処する視点として、職場で仕事をスムーズに行えるのか、職場の人間とうまくコミュニケーションができるか、自分をサポートしてくれる物的、人的資源を持っているのかが考えられる。ただし、これは大人の場合である。在日外国人の大人、特に就労者の異文化ストレスの対処を考えることも非常に重要であるが、そこには家族や子どもの存在も忘れることができない。家族という枠組みから考えれば、親が日本の中で自分らしく生活できることも重要であるが、子どもが日本の学校教育の中でその子らしく生活できることも同じように重要である。そのため、基本的には親と子の両者の視点を照らし合わせながら、両者の関係性の中で、異文化ストレスへの対処や日本でのその人らしい生活の仕方を考えていきたい。

本稿では、2007年夏に長野県上田市で行った日系ブラジル人家族へのヒアリング調査を通して、上田市での在日外国人と外国籍児童生徒への支援の在り方、ひいては多文化共生社会の実現性について検討する。上田市は、全国的にも珍しい外国籍児童生徒を対象とした集中日本語教室「虹のかけはし」というプレスクールを開設していたり、「上田市多文化共生まちづくり推進指針～ともに生きる社会をめざして～」を作成していて、多文化共生社会の実現に積極的な自治体である。今後も上田市と協働しながら、より具体的な支援活動を展開していく上でも、本稿では日系ブラジル人家族が抱える様々な葛藤や迷いを、親の視点と子どもの視点の2つの視点から考え、そこから考えうる支援の提示につなげたい。

2. 日系ブラジル人家族のヒアリング調査概要

調査時期は07年8月・9月に、上田市の行政職員の紹介による上田市在住の日系ブラジル人家族計15組（親世代28人、子世代25人）からヒアリング調査を行った。調査を行う前に、ポルトガル語に翻訳した同意書にサインをもらい、個人が特定されないこと、調査目的以外でデータを使用しないこと、ヒアリング内容の録音に同意された方に、調査を行った。ヒアリング調査は、上田市に住む在日ブラジル人はどのようなことで困っているのか、在日ブラジル人児童生徒が学校や地域で生活する上でどのような困難を抱えているのかを明らかにすることを目的として、方法としては半構造化面接の手法をとり、あらかじめ質問項目を設定した。質問項目については、在日ブラジル人が来日から日本で生活する間にどのような困難を抱えているのかを聞き取るための項目となるように設定をした。質問項目は親向けに、①移住の経緯、②日本の生活で良かった経験や困った経験について、③最近の子どもの様子で気になること、④子ども達の教育につい

て気になること、⑤日本での仕事についての5項目を設定した。子ども向けには、①学校での良かった経験や困った経験について、②学校内でのサポート源について、③将来の夢についての3項目を設定した。家族によっては、両親から話を聞くことができた家族もいれば、仕事の関係ということで母親だけからしか、話を聞くことができない家族もあった。また、親と子どもは特に別々に話を聞くということはせず、親子同席の場で、1時間から2時間ほどの時間をもらい、主に先述した質問項目についてヒアリング調査を行った。表1にヒアリング調査協力者の概要を示す。

表1 ヒアリング協力者の概要

| | 親世代 | | 子世代 | |
|------|-------|-----|--------|-----|
| 性別 | 男性 | 13人 | 男性 | 16人 |
| | 女性 | 15人 | 女性 | 9人 |
| 年齢 | 20代 | 1人 | 6～12歳 | 18人 |
| | 30代 | 13人 | 12～15歳 | 5人 |
| | 40代 | 14人 | 15～18歳 | 2人 |
| 在日年数 | 1年未満 | 0人 | 1年未満 | 0人 |
| | 1～5年 | 6人 | 1～5年 | 8人 |
| | 5～10年 | 16人 | 5～10年 | 8人 |
| | 10年以上 | 6人 | 10年以上 | 9人 |
| 出生地 | — | | 日本 | 11人 |
| | | | ブラジル | 14人 |

ヒアリング内容を分析するにあたり、ヒアリング内容を協力者の同意のもとに録音し、逐語録を作成した。その逐語録を元に会話内容をKJ法によるグループ編成の方法に従ってカテゴリー化した。編成作業は、①1つの逐語録を熟読し内容的に近い発言を集めサブグループを作成する、次に、②異なる逐語録の発言内容を作成したサブグループに当てはめる、③その際発言内容によっては新たなサブグループを作り出したり統合したりする、④すべての逐語録について同様の作業を行った後サブグループを読み返し、そのグループの内容を圧縮した表現を検討し命名する、⑤サブグループ間の関係を考え、大カテゴリーを作り命名する、といった①～⑤までの作業を行った。グループ編成を行うにあたり、親と子の発言を別々のカテゴリーとして分類するように試みた。これについては、イシカワ(2005)が在日ブラジル人家族について、言語と教育環境の面から3つのタイプに分類を試みているが、その分類の中で多いタイプが「親が家庭でポルトガル語を

使用しているが、子ども達は（学校でも家庭でも）日本語を話す」家族であるとしている。日常的に使用する言語が異なるということは、自ずと日常的に抱える困難さは異なっていることが推測される。以上の点から、親の視点、子の視点という2つの大きなカテゴリーを想定し、ヒアリング内容の分析を行った。表2、表3に、カテゴリー化した結果を示す。

表2 親の視点から見た日本で生活する上での困っていることの内容

| 大カテゴリー | サブカテゴリー |
|---------------|--|
| 使用言語の問題 | 日常的に日本語を使わないこと 子どもとの意思疎通／母語の維持 相談相手の不在 |
| 将来の見通し／生活上の障壁 | 子どもの育て方／教育 将来どこに住むかの見通し 現在の生活水準の維持 病気や出産の際の対処（病院） 社会保険について |
| アイデンティティー | 子どもへのブラジル文化を伝えることの迷い 日本文化の受け入れること 親として子どもと話す時間が取れないこと |

表3 子の視点から見た日本で生活する上での困っていることの内容

| 大カテゴリー | サブカテゴリー |
|----------------|--|
| 日本語の理解／日本語での学習 | 日本語を覚えること 学習思考言語／漢字習得の難しさ 親との使用言語の違いによるわからなさ |
| 学校・生活上の障壁 | 進学に関する選択肢の少なさ 日本の生活習慣に慣れること 日本の学校生活に慣れること |
| アイデンティティー | 進学についての不安 将来なにをしたいのか |

3. ヒアリング調査の結果から見てきた在日ブラジル人が抱える困難

3-1. 親の視点より（『 』内はヒアリング調査の協力者の発言）

(1) 使用言語の問題

ヒアリング調査に協力した親世代の方の多くは、日本語をあまり話すことはなかった。親世代にとってみれば、日常的に日本語をあまり必要としていない。彼らの多くは、ブラジルから上田市に住む親族を頼って来日していることが多く、上田市内で派遣社員として就労していることが多い。職場は日系ブラジル人が多く、日本語でなくとも、母語であるポルトガル語でコミュニケーションを取ることができる。今のままの就労環境であれば、仕事上日本語を話す必要性に迫られることはないと思われる。日常生活においても、子どもとの関係を除けば、簡単な日常会話だけで事足りている。意識的にも、あまり日本語を覚えたいという人は少なく、今のままで十分という認識を持っている人が多かった。

そのような中で親世代が言葉の問題で最も困っている点は、子どもとの意思疎通に関する点である。特に日本生まれの子どもの場合、家ではポルトガル語、学校では日本語という環境において、日本語の方が先にどんどん上達していく。子ども達は、幼い頃にポルトガル語を親との間で覚えても、学校の中で日本語を話す時間が長くなれば長くなるほど、ポルトガル語を“忘れていく”ということが起こっている。その状態は、親から見れば『子どもが何を考えているのかわからない』『子どもとうまく話せない』という感覚につながる。このコミュニケーションのずれは、小学校高学年以降の思春期に入り、より大きくなる。親は子どもに自分の言いたいことがあまり伝わっていないのではないかと、子どもの中の細かい気持ちの揺れ動きがわかっていないのではないかと感じる。親としてみれば、子どもにポルトガル語の上達を願い、家でポルトガル語を積極的に教えているという人もいたし、逆に日本の学校に通っているため、あまりポルトガル語にはこだわらず、学校でうまくやるために日本語の方を上達してほしいと思っている人もいたなど、様々な考えを持っていた。ただし、どちらの考えをもつ親も『このままで良いのだろうか』という迷いを抱えていた。

また、子どもの学校とのやり取りも、日本語で書かれた文書がわからず、子どもの言葉で説明を受ける以外、理解することができない。最近では、学校内に配置されているバイリンガルの教員によって、ポルトガル語の文書として受け取れるということで、とても助かると感じている人も多かった。ただ、親は担任の先生と直接やり取りをしたいような状況であっても、言いたいことが伝わらない、言われていることがわからないと強く感じるようであり、親としては子どもの教育に関することは悩みの種である。ただし、多くの親は日本の教育システムや教育環境について、好意的に受け取っていて、『子ども達の教育は日本で終えさせたい』と思っている。

親の視点から見た言語の問題は、自分たちの就労や日常生活との関係よりも、子どもとの意思疎通や教育問題として語られることが多かった。

(2) 将来の見通し／生活上の障壁

多くの親は派遣社員として、働いていた。勤務時間はそれぞれ異なるが、基本的に朝早くから夜遅くまでである。多くの親は来日の目的として経済的な理由を挙げているが、そのためか、労働条件よりも賃金を優先する（雇用関係上優先せざるを得ない）人が多いようである。つまり、週末の出勤や長時間労働という環境で働いている人が多かった。この状況は親の中の『子どもと接触する時間が少ない』という悩みを生み出す。親からすると、子どもと生活する時間が少ないことは気がかりな点ではあるが、生活するためには今の状況を変えることができないというところが正直な部分であるように思われる。その点は、親の努力によって改善を図るということは難しく、雇用先の企業や行政の支援によるところが大きい。

雇用関係で、もう1点親を悩ませているのが、今後も今の雇用が継続されるかどうかという点である。親が仕事をしていて、稼ぐことができるから、家族としての生活が成り立ち、上田市に継続的に住むことができるのだと思われる。この点はもちろん日系ブラジル人に限ったことではなく、非正規雇用や派遣社員の日本人にとっても切実な問題ではある。ただ日本人と異なるのは、その雇用の問題に家族の引越しや移住が含まれる点にある。多くの非正規雇用の日本人の場合、今現在の仕事を失っても、同じ地域でもしくは今の居住地域から通うことができる範囲で仕事を探す傾向にあると思われるが、日系ブラジル人の場合は、他の日系ブラジル人が多く住む都市や親族が生活している地域への引越しを考える傾向にある。またそれでも仕事が見つかりそうにもない場合には、ブラジルへ帰国するという選択肢も視野に入れている。もちろん、元々は経済的な理由で来日しているため、意識的には帰国を前提とした来日になっているのかもしれないが、帰国をするのかどうかは曖昧に語られることが多い。それが曖昧にされるのは、以下のことを考えると理解しやすい。日本で生活していく中で、夫婦だけの問題ではなく子どもの日本での教育が絡み合ってくるし、しかも今の雇用が維持され緊急で帰国する理由がなければ、帰国するかどうか考える必要も生まれない。親の中では常に帰国するかどうかの迷いと、現状の雇用関係に対する不安がとても大きい。

(3) アイデンティティー

アイデンティティーとは、まさに“自分らしさ”と考えることができる。これは Erikson, E. H. の人格発達理論における青年期の心理社会的危機を示す用語として使用されているが、心理学辞典によれば、「自分は何者か」「自分の目指す道は何か」「自分の人生の目的は何か」「自分の存在意義は何か」など、自己を社会の中に位置づける問いかけに対して肯定的かつ確信的に回答できることがアイデンティティーの確立ということになる。日系ブラジル人の親世代にとってのアイデンティティーとは何であろうか。ある人は『ブラジルにいても日系人という外国人扱い、日本にいればブラジル人という外国人扱い。自分達はいったい何人なのか』と笑いながらではあるが話していた。普段は当たり前過ぎてあまり感じないが、自分が属する国がどこであるのかということとはとても大切なことのように思われる。まさに自分らしさの中に、自分は〇〇人であるというものが含まれるからである。また、何人かの日系人は、来日時、出稼ぎという意味合いだけではなく、日本に対する興味や親和性があったという。日系ブラジル人は、来日することで、社会的な地位が低下してしまうかもしれない、言葉や文化が通じない生活になるかもしれないといったリスクがあるにも関わらず、来日を決意する。そこには、ブラジルでは必ずしも得られなかった所属感を、日本で得ようとする、ひいては自分がどこの国の人間なのか、どこの国に根をはったらよいのかを模索しようとする行動のようにも感じられる。そのような状況を視野に入れてみると、やはり受け入れ側である日本人の対応は重要である。そのような日系ブラジル人をブラジルで起きていただろうことと同じように外国人として接するのか、隣に住む同じ市民として接するのか、非常に重要な意識である。日系ブラジル人にとっては、日本語が流暢になると、日本の文化の中でうまく生活できるようになっても、就労環境が安定しようと、日本の中に所属感がなければ、日本の中に居場所があるとは思えないと思われる。今後、住民や行政と協働しながら、そのような日系ブラジル人が居場所と感じる場を、地域の中に作っていく必要があると思われる。

3-2. 子の視点より（『 』内はヒアリング調査に協力した人の発言）

(1) 日本語の理解／日本語での学習

人間にとって、言葉の果たす役割は大きい。まして発達途上の真っ只中にある子どもにとって、言葉の果たす役割は非常に大きい。言葉については、岡本(1984)が①命名の機能、②弁別性、③社会的理解の道具という3つの役割がある

と述べている。命名の機能とは、ある物体や状態を恒常的に定常的なものとして保持する機能であり、弁別性とは、言葉が指示している事象の一般性を確保することであり、社会的理解の道具とは、言葉がその人の観念や表象、思想というものに対応していて、言葉を理解するということはその人の考えを理解する、つまりお互いを理解するという機能である。他者との関係性の中の言葉について、石谷(2007)は、言葉を使用することでの乳児の世界の広がりとして、「言葉は特定の経験を記号化することで『今、ここで』を離れて用いることができるようになる」と述べている。つまり、言葉を使用することによって、『今、ここで』のやり取りのみでなく、時間的な軸の広がりをもって、他者と共有することができるということである。これらのことより、言葉は自分以外の人とコミュニケーションを取るための道具となるし、自分の気持ちを言語化する道具ともなる。言葉を使うことによって、人と関わりを持ち、自分についての考えが深まり、論理的な思考が発達し、自分らしさを感じるようになる。それらの機能があるため、言葉の果たす役割は大きいと考えられる。今回のヒアリング調査に協力してもらった方は、年齢が6歳から18歳までと多様であった。しかも、日本生まれである子どももいれば、ブラジルで生まれて来日した子どももいた。来日した年齢や時期も、幼少期から小学校高学年までと様々であった。ただ、共通しているのは、言葉についての困難さを抱えているということであった。

ブラジルで生まれて来日した子どもは、まず日本語を習得することがとても大変である。ブラジル人学校ではなく日本の学校に入学した際、ポルトガル語はそれまで使用してきたため、家族とのコミュニケーションは問題がないが、他の児童生徒とのコミュニケーションがとても難しい。日本の学校での生活の流れも、どのような方法で勉強が進んでいくのかも、どんな決まりがあるのかもわからず、しかも言葉が通じないし、言われていることもわからない。子ども達から見れば、いきなり異なる環境で、通じない言語の中で生活しなければならないことのストレスは非常に大きい。親は仕事にポルトガル語を使用できる環境にあるため、日常生活の中でポルトガル語をほとんど使えない子ども達の方が日本で生活していく上では困難が多いのかもしれない。ブラジルから来日してきた多くの子ども達がぶつかる壁は、漢字や歴史である。特に小学校高学年からは複雑な漢字が教科書のいたるところに出てくるようになるし、中学校になれば簡単な日常語はほとんど出てこなくなり、より難しい日本語となる。たとえば、日常的な日本語について話したり聞いたりすることが問題ない児童生徒でも、小学校高学年から中学校の教科書に掲載されている難しい日本語を理解することはなかなか困難なよう

である。これは日常語の習得とは別に、学習言語の習得が必要なことを示している。多くの子どもは驚くほど素直に『僕はもっと勉強したい』と語る。そのような子ども達の学習意欲や前向きな人生観を失わせないためにも、子ども達が自分のやりたいような学習を選択できるような言語的支援を充実させる必要がある。

日本で生まれた子どもの場合、ブラジルで生まれて来日した子どもとはまた違った言葉の困難さを抱えていた。ブラジルで生まれ、10歳頃で来日した子どもの多くは、ある程度母語としてのポルトガル語が確立しており、家族とコミュニケーションを取ることが可能である。自分の気持ちもポルトガル語で親に伝えられることができる。日本で生まれた子どもは、その点に困難さを感じるということだった。日本で生まれた子どもは、幼少期に親にポルトガル語を教えられてはいるものの、日本の保育園や幼稚園、小学校と段階が進むにつれ、ポルトガル語よりも日本語を使用する機会が増えてくる。相対的に日本語の方が上達し、学校の先生や友達と話すときに日本語を使用することに困難さは感じなくなる。ただし、そのような状況になると、今度は家族とポルトガル語でやり取りすることが難しくなる。正確に言えば、日常的なやり取りはポルトガル語でもできるようなのだが、自分の気持ちの複雑な部分をポルトガル語で表現したり、ポルトガル語で表現された親の気持ちを理解したりすることが難しくなるのである。そのような状況になると、親と子どもの会話はどんどん少なくなる。子どもからすれば、『面倒くさいことは言わない』ことになるし、『親にわからないように日本語で怒る』ようになる。ただでさえ、思春期にいる子どもは親（大人）との考えの相違に悩むようになるし、親との接触を好まなくなる。そのような発達の特徴に加え、言葉で複雑な気持ちのやり取りをすることができない状況は、大変なストレスであると思われる。日本生まれの子ども達のポルトガル語（母語）に対する支援も必要であると思われるが、子どもから見れば、親からの歩み寄り、つまり親が日本語を習得しようとする姿勢も大切のように感じた。また、そのような子ども達にとって、親以外で自分の気持ちを語ることができる大人の存在も必要であると思われる。

(2) 学校・生活上の障壁

子どもの日常生活の場は主に学校である。子ども達は学校で様々な困難に遭遇する。特にブラジルから来日した子どもにとって、最たる困難は先述した言葉であるようだが、給食や時間割などについても困難を感じていた。給食については、もちろんそれまで食べた事がないような味付けであるし、食べたことがない食材

が出てくることもある。もちろん給食は日本の文化になじみやすいものであるため、このようなカルチャーショックが起きても当然である。時間割については、ほぼ同じ教室で自分の決まった席に座り、朝から夕方まで授業が続けられるということはブラジルの学校教育とは異なる。時には日本の学校に慣れず、教室や学校を飛び出してしまう子どももいたとのことだった。日本とブラジルとでは学校教育の方法論が同じではないため、当然このような混乱が起きているのだと思うが、そこで重要になってくるのが学校内の相談資源である。多くの子どもは、相談相手にバイリンガルの教員や年上の兄弟、同じ外国籍児童生徒を挙げていた。子ども達にとっては自分が困ったときにそれを一緒に解決してくれる大人の存在は重要である。ただ、バイリンガル教員が週に1回のみという学校も多く、そのような学校の場合、外国籍の子どもが相談する先がなくなってしまうのが現状ではないかと思われる。子どもによっては“心の教室相談員”という相談役を兼ねている先生に相談するという子どももいたが、外国籍児童生徒に限らず、子ども達の相談資源はもっと充実が図られなければならない。

また、子どもから見ると、親に対しての寂しさを感じているようである。親は朝早くから夜遅くまで仕事をしている生活である。子ども達は、学校が終わる夕方頃から親が帰宅する夜の8時か9時ごろまで子ども達だけで生活している。そこには一緒に宿題を手伝ってくれる親も、学校であったうれしかったことや悲しかったことを共有してくれる親もいない。子ども達だけで生活しなければならない時間なのである。だが、多くの子ども達はそのことについての不満を持っているのかもしれないが、今回のヒアリングでは語られることは少なかった。子ども達も親の仕事のことをよく理解しており、親を困らせないように決して寂しいとは言わないようにしていたのかもしれない。家族の引越しや移住についても、同様のことが言える。日系ブラジル人の子ども達は親に従順であり、基本的に親の言うことはよく聞く。そのためか、家族の引越しや移住について、子ども達の意見が反映されることはほとんどない。もちろんその点は親が子どもの気持ちや状況を十分考えて決定するのかもしれないが、子ども達には決定権はないのである。子ども達は今いる環境の中で一生懸命頑張り、慣れようと努力している。子ども達のほとんどは、『日本で大学まで進学したい』と思っているが、それも現実的には親次第である。やはり親が日本にいるという選択をし続ける限り、子ども達が日本での将来を描きやすいようなキャリアの構築を考えていかなければならないだろう。

(3) アイデンティティー

子どもにとってみれば、親よりもアイデンティティーの問題は切実である。そもそも、このアイデンティティーが確立する（確立すると言われている）のが、おおよそ青年期である10代後半から20代にかけてである。まさにその確立に必死になっている、もしくは発展途上・準備段階にある年代と考えられる。Erikson, E. H. によれば、この年代の子どもは“自分は～だ”ということを見つけては、自分らしさの土台としていく。つまり土台を作ることがとても大切な時期である。この時期には、友達とうまく付き合うこと、勉学に励み達成感や成功感を味わうこと、人と関わることで自分と同じ価値観を持つ人を見つけ仲間の中に所属する感覚を持つこと、自分の考えや価値観を論理的に主張することなど様々な経験が必要になってくる。その中で、自分らしさを見つけていくのである。今挙げたのはほんの一例であるが、どの経験も日系ブラジル人の子ども達にとってみれば、ハードルが高いことのように感じられる。もちろん、それは言葉や日常生活を含めた、子ども達を取り巻く環境によって作り出されている部分が多い。子ども達がよりしっかりとしたアイデンティティーを獲得していくためには、自分が目指したいと思うような、同じ日系ブラジル人のコミュニティーからのモデル像の存在が助けになるのではないだろうか。

3-3. まとめ

(1) 言語について

親の言語的な問題は、就労環境などとの関連から、直接的には困っていない状況にあった。ただし、親から見れば子ども達の日本語が親よりもどんどん上達し、コミュニケーションが取りにくくなっていく状況に不安を感じており、実際子どもが何を考えているのかがわからないと感じていた。逆に、子どもから見ると、親と日常的に使用する言語が異なるため、親に自分の気持ちを理解してもらえない寂しさや、自分の考えを主張できないもどかしさを感じていた。親から見れば子どもの母語保持、子どもから見れば親の日本語習得を願うという両面があった。この言語の問題は双方からの歩み寄りが必要であり、双方が自主的かつ自由に選択できるようなコミュニケーション支援が必要であると思われる。

(2) 日常生活について

親は雇用や就労に関することが切実な問題となっている。特にこの雇用に関しては、親子ともに将来を直接的に左右する要因であるため、今後この就労面が安

定することが、日系ブラジル人家族を支える極めて重要な要因になると考えられる。子どもに関しては、親の雇用状況によって、教育環境ががらりと変わってしまう可能性が非常に高い。この点は、多分に世界の経済状況や企業の経営状況によるところが大きいと考えられる、それを考慮に入れても子どもの教育については、何かしらの手立てが必要である。いずれブラジルに帰国するのだからという曖昧さは捨て、日本で就労までのキャリアを積んでもらうことを念頭に置いた支援の構築が必要であると思われる。特にその支援を構築するためには、行政のみならず地元の企業の協力なくしては行えないであろう。

(3) アイデンティティーについて

アイデンティティーについては、親も子も迷いを多く抱えた状況にあると思われる。どちらの視点からも、日本社会の中にかんじて根を下ろせるかという問題に直面する。コミュニケーションの手段となる言葉の問題や、雇用・学校生活を含む日常生活の問題を解決することに加えて、日系ブラジル人が上田市へ所属感を持てるような支援や仕組み作りが必要である。特に子どもの場合は、その土台づくりとなる様々な体験ができるような、学校教育の枠組みだけでない、親も含めた地域での関わりが重要になってくると考えられる。

4. 在日外国人・外国籍児童生徒への多文化的支援

日系ブラジル人家族 15 組のヒアリング調査から分析したことを、言語、日常生活、アイデンティティーという 3 つの観点に絞って、かつ親と子のそれぞれの視点から検討してきた。ここからは、それらの観点を、言語は「コミュニケーション支援」に、日常生活は「キャリアデザイン支援」に、アイデンティティーは「こころの支援」に対応させ、支援の視点を考えていきたい。

4-1. コミュニケーション支援

ヒアリング調査を実施した時期はいわゆるリーマンショックが起こった 08 年 9 月のちょうど 1 年前だったということもあり、さほど経済状況が悪化している状況ではなかった。そのためか、親の日本語意識としては現状で十分と答える親世代が多かった。08 年 9 月以降、特に上田では失業する日系ブラジル人が多く、以前よりも緊急性をもって引越しか帰国かを迫られている状況である。ただし、やはり子どもの教育との関係から帰国を選択する家族は少なく、親世代は上田市の中で仕事を探している人が多く、そのために日本語が必要になってきている現

状がある。つまり、ヒアリング調査時とはまた異なった状況になっており、親世代の日本語習得意欲に実際、変化が起きている。

このような社会状況から、言語的な支援については、子どもだけではなく、親世代のニーズも高くなっている。具体的には地域日本語教室の活用である。日本語教室とはまさに日本語を学習するために開かれた教室であるが、この場が在日外国人にとって日本語を学習するだけではなく、地域の中に根を張れる場所や地域住民と交流ができる場になりつつある。坪谷(2005)は外国人の子ども達のための地域学習室を論じる中で、「ニューカマー外国人の第二世代にとっての将来像が不明確になりがちなか、地域学習室は子どもと日本社会との接点を拡大する機能を持ち合わせている。地域の年輩者、同じ国出身の若者、自分の親と同じような経験をしてきた通訳者、地域外から通ってきてくれるボランティアとの関わりも、こうした教室で得られるにちがいない」と述べている。つまり、上田市でも日本社会との接点を拡大する意味での、在日外国人の居場所という意味合いに近い場を作っていく必要があると思われる。また、「日本語能力の獲得をブラジル人としてのアイデンティティーや自尊心の否定につながる形ではなく進めることが重要」(イシカワ 2004)であるため、言語支援についても、そこにはアイデンティティーの形成に繋がる支援も含め、母国ブラジルの文化を尊重しながら、コミュニケーションとしての言語を学べるような工夫が必要であろう。

子どもの言語支援についても、親同様、子ども達も地域の中での集えるような場を作る必要があり、そこでは日ごろの学習をサポートしたり、子どもの悩みや相談にあたりたりできる場であるべきである。将来的にその地域資源と公的な教育相談とが連携できるような体制であれば、学校と地域との間につながりが生まれ、その子どもを様々な視点からサポートできるのではないだろうか。ただし、将来的に子ども達がブラジルに帰国する可能性も忘れてはならない。帰国する際に備えて、簡単な日常のポルトガル語は保持できるような取り組みが必要である。もちろん公的な教育の中でそれを支援することは困難なので、まずは現実的なところから、地域の中でポルトガル語に触れる教室を開設したり、ブラジルの文化を広める教室を開いたりする中でポルトガル語を学習したりできると良いのではないと思われる。それらの支援が言語支援のみならず、アイデンティティ形成の手助けにもなると考えられる。

特に最近、ブラジル本国では、第二世代の子どもたちのブラジルでの再適応が問題になっている。ポルトガル語はあまりできず、かといって日本語も不完全で、自分の感情を表現したり考えを主張できる言語が確立されていない。そうした子

どもたちが、リーマンショック以後続々と帰国し、ブラジル日系人社会では大問題になっている。

4-2. キャリアデザイン支援

キャリアデザイン支援は、主として日本で生活する外国籍児童生徒が日本でこのまま生活し続けることを念頭に置いた子ども向けの支援である。もちろん途中で帰国してしまうこともあるのかもしれない。だが、まずは日本に残って就労までつなげるような道筋を持つべきであると思う。そこには、同じコミュニティからのモデル像が必要である。子どもの中には、中学校を卒業したらすぐに働きたいと言っている子どももいた。それは決して積極的な選択ではなく、高校や大学への進学をあきらめているという気持ちも垣間見られた。そこに、もう少し周りの支援が入れば、必ずしもそのような選択をしないう可能性もある。もちろん、中学校を卒業したのちにすぐに就職をするということも1つの選択であるが、様々な選択肢を用意しておいてあげる必要がある。つまり、このキャリアデザイン支援によって、子ども達の選択肢がいくつか広がり、その中から1つを選択するという状況になってほしいと考えている。

4-3. こころの支援

最後はこころの支援である。先述した通り、親自身のアイデンティティーの揺らぎや不安定な雇用状況は、決してメンタルヘルスの面からも良いとは言えない。もちろんこの状況が一気に好転するとも思えないが、せめて地域や在日外国人のそばに相談できる場があるとよいと思われる。加えて、この場は決して専門家がいる場でなくともよい。自分の中だけに留めるのではなく、信頼できる友人や地域住民に話して、悩みを共有できることが必要なのである。その中で専門家の支援が必要であれば、そのような機関につなぐことができればなお良いと思われる。この場は、やはり地域の中にある日本語教室が理想とするイメージに近い。日本語を学習するという目的で集まってはいるが、そこでは日本語を学びながら、地域住民との交流が活発に行われ、なおかつ自分が悩んでいることや不安なことを話すことができる、そのような交流の場である。時には、専門家が参加するこころの相談会が継続的に開かれるとよい。

子どもの場合も同様ではないかと思われる。放課後の居場所を作り、そこで日常的な宿題をしたり、他の子どもと交流できたり、自分の困っていることが相談できたりできるととても良い支援になるのではないかと思われる。担い手として

は子ども達に年齢に近い大学生などのピアサポートを想定している。もちろん、地域の中でそのようなことに興味がある人たちに、活動に参加してもらう必要がある。日本語の支援が必要な子どもも、そうでない子どもも、もちろん日本人の子どもも、みんなが一緒になって活動が立案され、実行されるのが理想である。これらの活動については、次年度以降、筆者自身も活動の中に入り、上田市と協働しながら、具体的な活動につなげていきたいと考えている。

5. 結語

以上、日系ブラジル人家族のヒアリング調査から日系ブラジル人の親と子の支援ニーズを分析し、そこから「コミュニケーション支援」「キャリアデザイン支援」「こころの支援」の3つの柱をみてきた。この3つの柱は独立で動いているわけではなく、それぞれが連動的、補完的に作用すると思われる。この3つの柱が、市民・行政・企業の間でうまく動くことができれば、大きな地域支援ネットワークの構築になるであろう。もちろん、15家族の意見がどれだけ上田市に住んでいる在日外国人の意見を反映しているのかは慎重にならないといけないが、その点は今後、上田市で行われる外国籍住民向けのアンケート調査にゆだねたい。そのアンケート調査の結果と比較しながら、今後、地域日本語教室を「コミュニケーション支援」「キャリアデザイン支援」「こころの支援」という3つの視点から、いかに地域の中で機能させることができるのかという点に焦点を絞りながら、外国籍住民に対する支援の在り方を再検討してみたいと考えている。

最後に、長時間にわたったヒアリング調査に協力していただいた15家族計53人の方々に、あらためて心から感謝を申し上げます。

【参考文献】

- イシカワ エウニセ アケミ, 2005, 「家族は子どもの教育にどうかかわるか」『外国人の子どもと日本の教育』, pp.77-96.
- 石谷真一, 2007, 「自己と関係性の発達臨床心理学」培風館.
- 川喜多二郎, 2002, 「発想法」中央公論社, pp.73-81.
- 岡本夏木, 1984, 「子どもとことば」岩波新書.
- 中島義明ら, 1999, 「心理学辞典」有斐閣.
- 吉田直子, 2004, 「『異文化体験』と子どもの発達に関する事例研究」常葉学園大学研究紀要.